

平城宮跡第217次東発掘調査現地説明会資料

1990年11月17日

奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部

[はじめに]

構内道路の撤去・第1次大極殿地区の整備に伴い、第1次大極殿地区の広場の北端部分で未掘であった旧道路下の調査は10月から本格的に取り組んでいる。本調査区は、7月から9月にかけて発掘調査した第217次西調査区の東側につづく部分で、石積擁壁などII期の基壇端の状況の解明と、調査区東部では、築地回廊部の解明をめざしている。

[これまでの知見]

第1次大極殿地区は、すでに第27・41・69・72・75・77・87・117次調査により東半分の様相が明らかになっている。西面築地回廊部分については、第192次調査と第217次西調査を実施している。

これらの調査によって、本地区は大きく3時期の変遷が確認されている。その概要は次の通りである。

◎第I期(平城遷都から天平勝宝5年(753)頃まで)

本地区は南北318m、東西177mを占め、その北3分の1が一段高い壇となり、その南に礫敷の広場が広がる。壇の前面は高さ2m以上の埴積みの擁壁となり、東西両端に広場に降りていくスロープが設けられている。I期はさらに4期の小時期に分けられる。

○第I-1期(和銅創建時)

本地区の周囲は築地回廊で囲まれる。回廊の基壇幅は10.8m、側柱の柱間寸法は桁行4.58m(15.5尺)、梁間は3.54m(12尺)である。壇上に巨大な正殿と後殿とが建つ。前者は桁行9間(45.1m)・梁間4間(20.7m)の四面廂付き建物で、恭仁京遷都時に恭仁宮に移された大極殿に当たる。

○第I-2期(神亀～天平12年(740)頃)

南面築地回廊に楼を増築する。

○第I-3期(恭仁京時代)

大極殿がなくなり、壇上には後殿だけが残る。東面および西面築地回廊

は撤去され、南北塀(柱間寸法4.58m=15.5尺)に変えられる。

◎第I-4期(天平17年(745)平城遷都後～天平勝宝5年(753)頃)

第I-1期の基壇を踏襲して東面および西面築地回廊が再建される。柱間寸法は、桁行3.95～4.0m(13.2尺)、梁間3.6m(12尺)である。

◎第II期(天平勝宝5年頃から延暦3年(784)長岡遷都まで)

本地区は大幅に作りかえられる。南面・北面築地回廊を内側に寄せ、南北の長さは186mになる。埴積擁壁は取り払われ、壇は南に18.3m拡張し石積擁壁となる。壇上には桁行9間の3棟を南北に並べる正殿を始め、多数の建物が建ち並ぶ。この地区は当時「西宮」と呼ばれたとみられる。

◎第III期(大同4年(809)以降)

平城上皇が再興した時期にあたる。基本的に第II期の占地を引き継ぐが、築地回廊は回廊部分が撤去され築地となる。壇上には正殿・後殿・脇殿が建ち、建物の間を塀や溝で区切る。平城上皇期(大同4年～天長元年(824))とそれ以降の2期に区分できる。

[今回検出した主な遺構]

上述したこれまでの知見によれば、今回の調査区は、東面築地回廊と、I期の広場の一部、II期の石積擁壁の部分に当る。検出した主な遺構は、第1次大極殿地区の東面築地回廊・門1棟・塀2条・溝6条・土塋5基などである。これらを上記の3時期に分けて説明する。

◎第I期

◇東面築地回廊

当初の側柱の礎石据え付け痕跡は削平により見つからない。本調査区は、217次西調査区とは異なり、地山面が高く、しかも礫を含んで硬いために築地構築の際に掘込地業は行わず、地山を切り出している。これまでの知見で外側の側柱列の跡に作られたことが知られている第I-3期の南北塀跡については柱穴が調査区内にかかると考えられるが、上面の遺構を残しているために未検出である。

◇広場・スロープ

東側スロープ(SF9232A)の西壁を飾っていた埴の抜取り痕跡の溝状遺構は、第117次調査の調査の際に調査区を旧構内道路下に拡張することによって調査されている。今回は旧調査区を清掃し、217次西調査調査区検出の西側スロープ東壁の埴抜取り痕跡の溝状遺構とあわせて、東西のスロープの端

を一望できるようにしている。埴積基壇前面の広場には礫を敷いており、後世の削平が著しい調査区西部では攪乱土を除去した段階で露出している。

◎第 II 期

◇東面築地回廊

側柱の礎石据え付け痕跡を1箇所を検出した。

◇石積擁壁(SX9230)

第117次調査で東端部の8 m分が検出済みであったが今回新たに、基底部の石およびその抜き穴29 m分を検出した。全長132mの約30%にあたる分を検出できたことになる。残りの部分は後世の削平を受けており残存していなかった。

◇石敷

石積擁壁の東西中央部において南北3m、東西^{0.5}1mの石敷を検出した。東側は水路によって削平されており、大極殿地区の中軸線で折り返すと東西幅は_{1.8}3.6m程度に復元できる。基壇中央の階段に伴う遺構の可能性がある。

◎第 III 期

◇東面築地・門

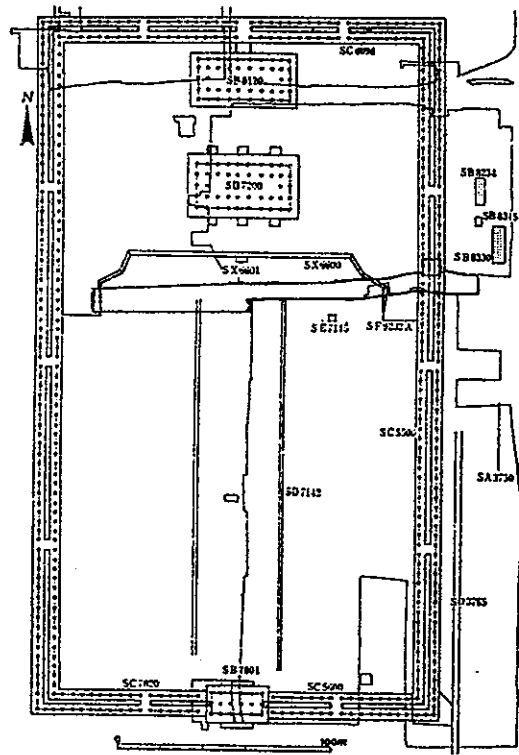
築地回廊はこわされて築地だけになり、東門(SB8310)が作られる。この門は南妻柱列を除き、第87次南調査で検出済みである。桁行3間、梁間2間。桁行の柱間は両端が2.7 m(9尺)、中央が3.9 m(13尺)、梁間は2.7 m(9尺)である。西半部でも対称の位置に門があり、第217次西調査で検出している。門の南側で築地寄柱の礎石と考えられる凝灰岩切石を2つ検出した。

◇広場・通路

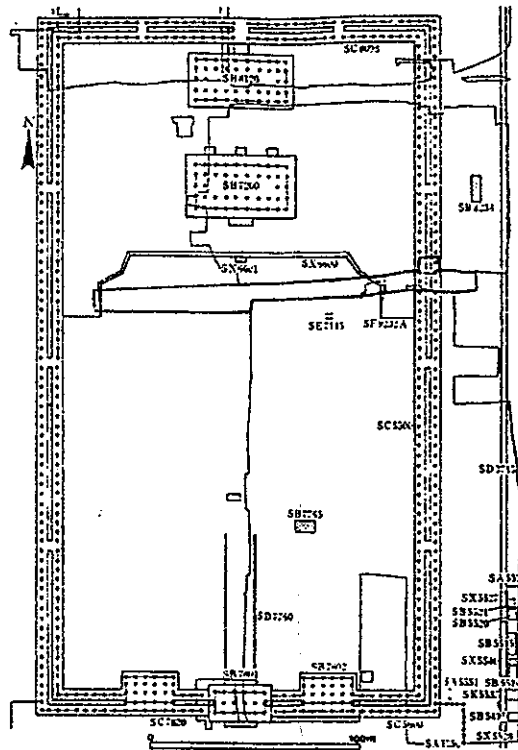
石積擁壁から南に延びる溝を2条検出した。これらは、本地区の中央軸に対して対称の位置にある。東側の溝(SD7133、第72次南調査で検出済み)は残りが悪い。西側の溝は、底に敷き並べられていた凝灰岩の切石を2 m分を検出した。

[まとめ]

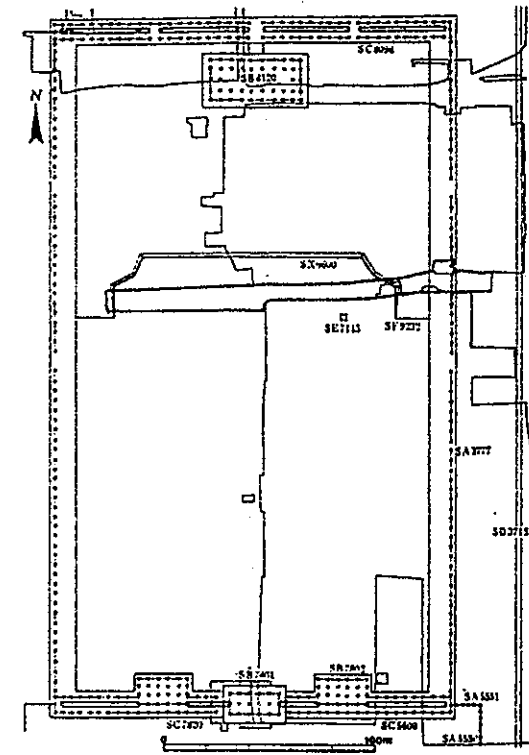
II期の石積擁壁を計37m分検出しその形状が117次調査で推定された通り直線状であることが確かめられた。これにより第1次大極殿地区の整備にむけて重要な基礎資料を提供できた。また、ひとつの地区を東西にこれほど長く一度に発掘することは、平城宮内では極めてまれなことである。



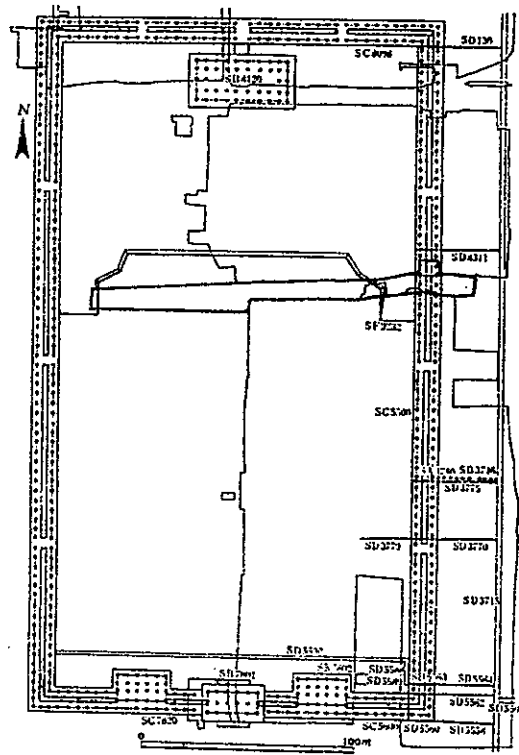
I-1期の主要遺構



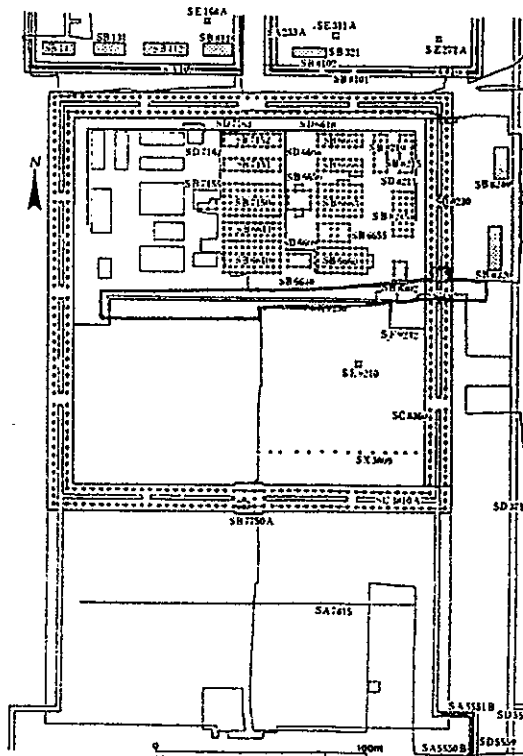
I-2期の主要遺構



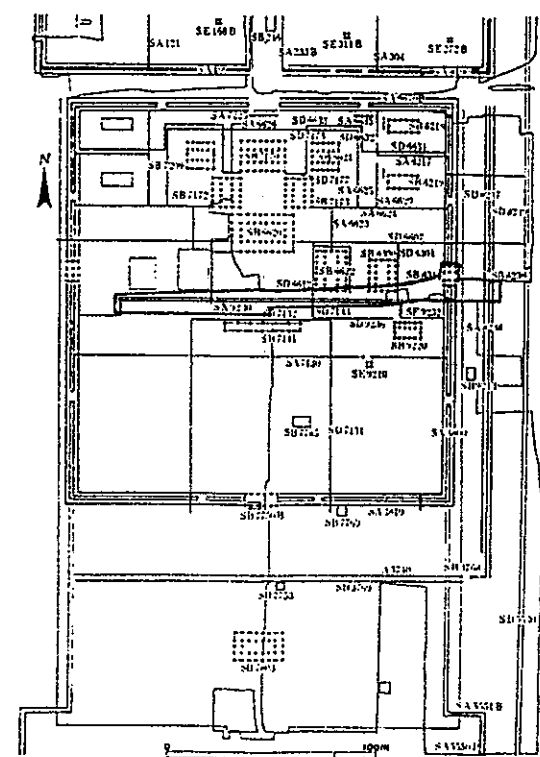
I-3期の主要遺構



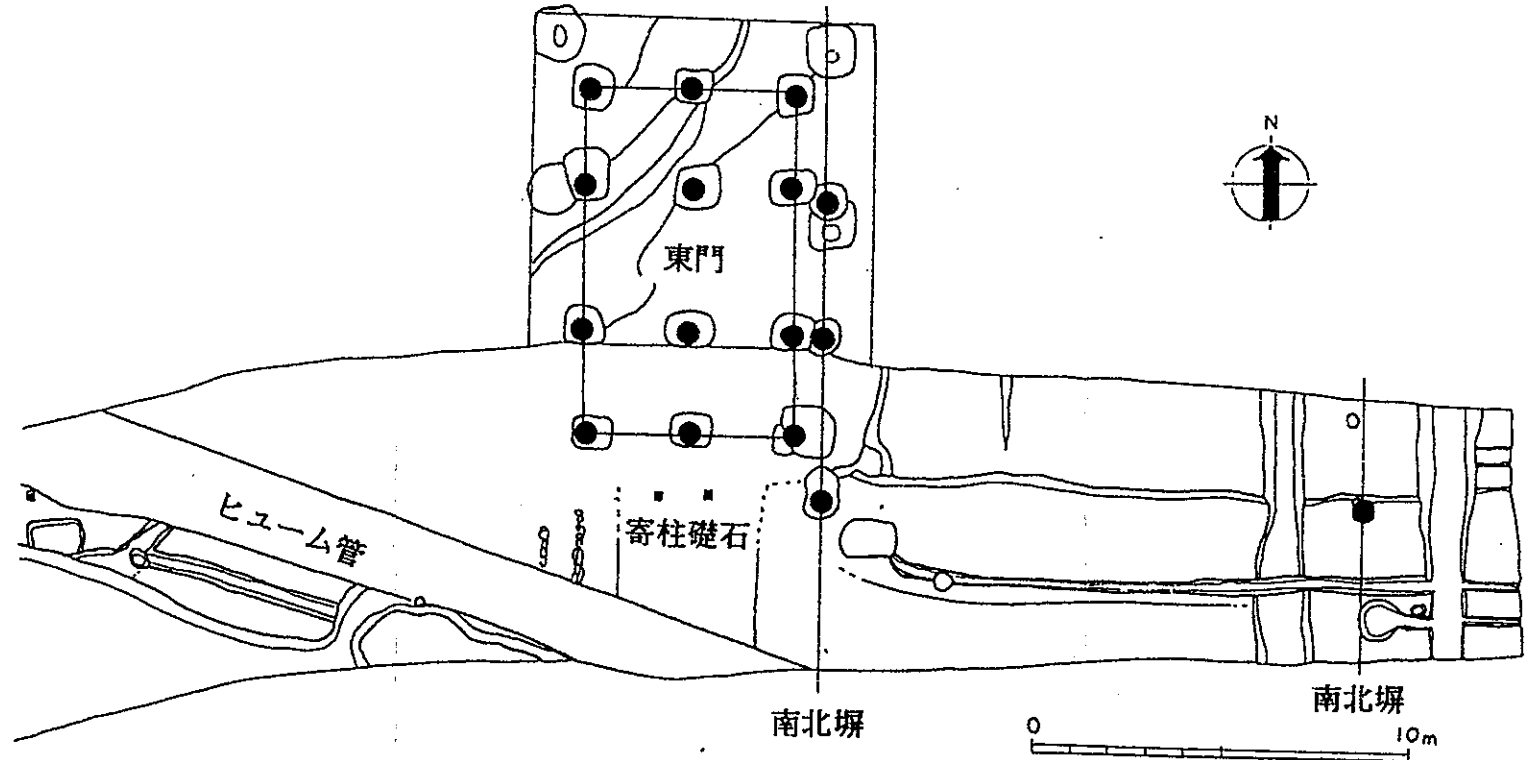
I-4期の主要遺構



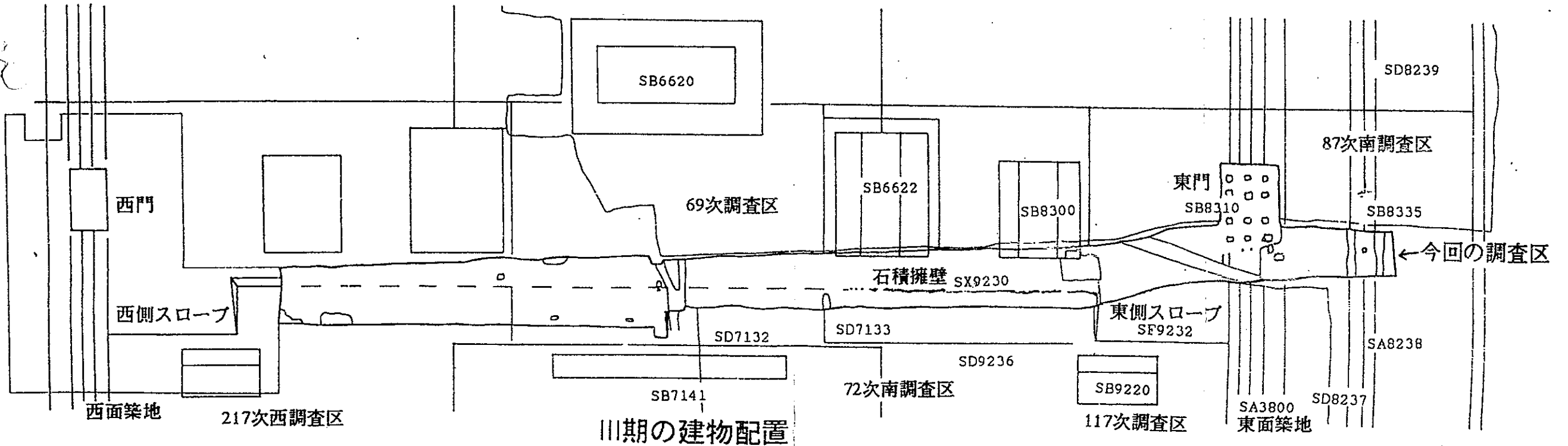
II期の主要遺構



III期の主要遺構



東面築地回廊付近の拡大図



III期の建物配置